

第6回国会等移転課題別講演会要旨

1. 日 時 平成12年3月17日(金)午後3時30分～5時
2. 場 所 西那須野町民ホール
3. 参加者 450名
4. 内 容 「文明・文化～新首都は北東へ～」

- 今日、那須野が原公園のサンスタワーに行ってきたが、「4万ヘクタールがこれほどの広さか」と、その美しい那須野ヶ原の景観に目を見張った。ここは日本の顔として本当に恥ずかしくないと感じた。
- 日本は、古来、東洋文明を入れてきた。明治維新以降は、文学から音楽、食事の体系に至るまで、西洋文明の考え得るありとありゆるものをトータルに入れようとした世界で唯一の国であり、そして、入れ切った。そのような意味において、東洋文明と西洋文明がこの国の2000年もの歴史の中で入ってきた。そして今後、日本の国の形をどう世界に提示するかという課題に直面している。国の形というものは、その国の表情として国の顔にあらわれる。国の顔とは何か。それが首都である。
- 世界の首都機能移転の例をいろいろと挙げて、「うまくいかない場合もあるから止めた方がいい」という人がいる。しかし、これはおかしい。それぞれみんな、その国の歴史的事情がある。外国における首都機能移転の成功・失敗から一般的結論を導き出して日本の基準にすることはできないと思う。首都機能移転について、私は賛成で、その首都機能は北東の方向に移るべきであると思っている。
- この国は、奈良、京都そして鎌倉、さらに室町、そして一旦京都に戻り、江戸に皇居が移り東京となるといふに、首都機能を変えてきた事実がある。それが日本の歴史の中でどういう意味を持ったのかを考えることが大事である。
- 京都から江戸へ首都を移すことは、長い伝統を持つ中国の文明から徐々に自立した過程を示している。その自立した江戸の実力の上に、新しい東京をつくった。
- では、あの東京というのは一体何か。言うまでもなく、日本の、北は北海道から南は沖縄に至るまで、人材、原料、技術、すべての英知を集積して、集積のメリットを生かして全体日本の枠を空ける、要するに欧米に追いつくための装置であった。言ってみれば、変電所みたいなもの。日本の津々浦々に西洋の文明を伝えていくための配電所であり変電所、それが東京であったわけである。よって、東洋の文明を入れ、西洋の文明を入れ切ったとき、東京の役目は終わった。
- では、どこをモデルにするか。モデルはない。21世紀日本の構想懇談会では「日本の中にフロンティアがある。」と答申を出したが、その日本のフロンティアは、一体どういうものとして構想すべきであるか。これを議論したのが国土計画と言われるものである。
- 世界史的に見た場合、インドから中国を経て日本へと北東に来たベクトルとチグリス・ユーフラテスからエジプトを経てギリシャ、ローマという北西に行くベクトルが出会う所が、日本における北東地域の方向になるということである。そういう意味から言うと、非常に納得のしやすい方向である。
- 日本においては、天皇は国事行為をなされるべきことが規定されている。首都機能において、移るべきものは、国会(立法)、行政、司法の3機関。そこにおける陛下の外交行為などは大変重要で、しかも非常に忙しい仕事である。

- 天皇の国事行為なしに日本の国家は運営できない。そういう脈絡で言うと、御用邸は非常に重要な意味を持っている。皇居のことを考えると、位置づけとして一気に他を圧する重要性を那須が持つてくるだろうと私は思う。
- 文明のベクトル、そして御用邸のことを考えると、那須というのは英語で言う「outofcomparison」、比較できない形で唯一の候補地になる。
- 明治時代に、千本松などの大農場ができ、松方正義、青木周蔵など明治の歴々がここ那須を愛した。一瞬これが日本かと思うくらいの景観である。統計を見れば、生乳製品において、本州では千葉に次いで第2位である。それくらい、見てきれいで実益を上げるようなものがつくられている。これも一朝一夕にはできない。これは何のためだったか。最後は、手段としての都市をつくって、最後の着地点というものを準備していたと読み変えることができるのではないか。絵に描いたような条件が整っており、土地の力、場所の力と言うべきものである。
- 那須は1番になった。だから、ここは首都になるんだ、日本の顔にするんだということ。我々は今、条件を提示されて立っているということである。
- その国づくりは、顔は顔だけでは成り立たない。体が要る。体に当たるのが国土である。
- 国土のあり方を根本的に変えようということで、これまで国土づくりは4回やってきた。今までのやり方は、要するに欧米に追いつくための拠点開発をするのが第1回の国土計画。第2回目は大規模プロジェクトを起こす。第3回目は定住圏構想で、人々が都市に出ていなくて済むように、工場を各地に移そうということだった。そして第4回目が中曽根総理の時で、多極分散と言ったけれども、とき既に遅しだった。しかし、この計画で見ているところは日本だけである。日本人の、日本による、日本の国のためだけの国づくりであった。
- しかし、この20世紀末、21世紀を目前にして我々が考えるべき国づくりは、果たして日本だけのためと言えるかということ、幸か不幸か言えない。日本という国の大きさは、我々が主観的に考えている以上に大きい。だから我々がどういう国づくりをするかということは、ただ日本人の問題のみならず、好き嫌いの別なく、隣方の人たちの関心事でもあるということに鑑みると、少なくとも「さすが日本」と思われるような国づくりをしたいものだと思う。
- 今度の国土計画は、「歴史と風土に根差した新しい文化と生活様式を持つ人々、即ち日本人が住む庭園の島（ガーデンアイランズ）とも言うべき日本をつくり、地球社会に向けて発信しよう」と、その理念を唱っている。歴史と風土に根差して、新しい文化と生活様式を持つ日本人が住む美しいガーデンアイランズ（庭園の島）日本をつくらうと言っている。それをどこにするか、それは、東京より西に広がっているいわゆる工業ベルト地帯ではない。
- 臨海工業地帯では、集積のメリットもあるが、デメリットも目立ってきた。多自然地域に日本のフロンティアがある。多自然地域に日本のフロンティアがあり、そこで日本の新しい顔をつくらうということである。ライフスタイルを変えようということである。ライフスタイルとは何か。「文化」である。
- 「文化」というのは、講演会とかお祭り、学問、芸術、芸能をもって、日本では「文化」と言われているが、それは文化の華の部分であって、日本だけで理解されているカルチャーの定義である。カルチャーの学術的定義は「cultureisdefinedasawayoflife」であり、国際標準化（グローバル・スタン

ダード)に即した文化理解に立たねばならない。

- 「日本人の生活様式」が「wayoflife」である。日本人一人一人の生き方の総体が日本の文化。つまり、日本の生き方が「文化」。日常生活の仕方が日本人の文化であるということである。何でもない衣食住、暮らしの立て方が文化である。今日の国づくりの基礎は文化であるとさえ言うことができる。
- 暮らしがどういうものであるかということを示しながら、日本の顔として首都をつくったらいいのではないか。今の日本では文化が一番大事であり、それが経済を引っ張っていく。もちろん、政治が新しい顔をつくることによって、ほかの地域あるいは他国を引っ張っていくモデルになる。
- 国づくりとは、一人一人の生活の質を上げていくことである。生き方が文化であるならば、人生の質を上げることが経済・政治の目的でなくて何か。人生の質をよくするために、文化を上げるために国づくりをする。歴史と風土に根差した新しい生活様式を持つ日本人の住む「ガーデンアイランズ」とも言うべき日本をつくって、地球社会に発信しようではないか。
- 那須地域で行われる国づくりは、単にほかの地域に真似られるだけではなくて、小東京に対して小那須というように、たくさんのいい意味での広がりが出てくるだろう。広がりが出てくれば、それは那須の歴史と文化に収まらなくなる。広がるとそれは「文明」と呼ばれる。だから、ここにおける文化が魅力になれば、広まり、普遍性を持ち、つまり「文明」になる。
- 日本は今、新しい文明をつくる前夜にある。こういう使命を今、この地域は担ったということだと思う。それが私の那須に寄せる思いである。このことは皆だけではなく、日本のためであり、かつ、日本をその一部とする地球社会のためであると思うからである。